

芭蕉の杜甫受容小論：「杜子がしゃれ」を手がかり に

石川，八朗
九州工業大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12153>

出版情報：語文研究. 36, pp.1-8, 1974-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

芭蕉の杜甫受容小論

—「杜子がしやれ」を手がかりに—

石川 八朗

「田舎之句合」の嵐雪の序に、次のような一節があることは周知の事実である。

桃翁、栩々齋にゐまして、為に俳諧無尽経をとく。東坡が風情、杜子がしやれ、山谷が気色より初て、其鉢幽になどらか也。ねりまの山の花のもと、渭北の春の霞を思ひ、葛西の海の月の前、再江東の雲を見ると。

この句合の、「俳諧に詩をのべた」漢詩的発想による新風企図を述べたもので、「桃翁」は桃青翁、「俳諧無尽経」は、南華真経（莊子）にならったもので、その「俳諧無尽経」の中に、いわば模範とすべき三人の詩人の名があげられているが、この三人は「李神杜聖蘇新黄奇」などと称されて、詩人の代表と目されるに十分な人々であることはいうまでもなく、各詩人に対応して用いられている「風情」「しやれ」「気色」の語も、一応ありふれたものとして見過ごすことができるかもしれない。しかし、こだわってみれば、なぜ、例えば「虚栗」跋のように

「李杜」ではないのか、「しやれ」は洒落、洒脱さの意として、李白でなく、杜甫と結ばれているのはなぜか、嵐雪の不注意な杜撰さや拙い文飾の結果のあいまいさなどの見方もあるかもしれないが、もしそうでないとすれば、何か尋常の措辞として見過ごせない疑問の余地を含んでいるように思われる。

一般に杜詩を評する場合、その至らざるなき情感や表現方法の豊かさを「其の詩平淡簡易の者有り。綿麗精確の者有り。嚴重威武三軍之師のごとき者有り。奮迅馳驟泛駕之馬のごとき者有り。淡泊閑静山谷隱士のごとき者有り。風流醞藉貴介公子のごとき者有り。蓋し其の諸緒密にして思深く、観る者苟も能く其の閨奥に臻らず、未だ其の妙處を識り易からず」（「遜齋閑覽」）、「詩人玉屑」所引）のごとく表現することもあるが、手短かに、また他の唐代詩人との比較で、杜甫の特色をいう場合は例えば、「開元天宝の間、則ち李翰林之飄逸、杜工部之沈鬱、孟襄陽之清雅、王右丞之精緻……」（唐詩訓解）、「子美は太白が飄逸を為す能はず、太白は子美が沈鬱を為す能はず」（貝原益軒「初学詩法」）など「沈鬱」の語で、あるいは「少陵之

忠憤、太白之飄逸、韓之豪放、柳之簡淡」（木下順庵「書詩仙
図後」）、「恭靖先生遺稿」所収）のごとく、「忠憤」の語でな
されている。いずれにせよ、重厚をもって称して、軽妙とは評
されがたく、「杜子がしやれ」の語も、何かそぐわない感じを
与える。

このような詩人と語句の対応、東坡―風情、杜甫―しやれ、
山谷―気色は、全く任意に選ばれ、対応させられたもので、ど
の詩人との語が対になってもいいものであろうか。そうだと
すれば、まず問題は無い。もし、詩人と語句の対応に意味があ
るとすれば、それはどんなものであろうか。例えば序文の文意
から見て、東坡・杜甫・山谷の三者の詩を踏んだ句が句合の中
にあつて、序文と対応しているということがあるかとも考えら
れる。そのことを検討すると、山谷の場合は、第三番の左の句
「宿の梅檜いかばかり青かつし」が、判詞にもいうように、山
谷の詩「上蘇子瞻」の「烟雨に青かつしが、已に黄になんぬ」
（「黄山谷詩集」巻一、「古文真宝前集」には、「贈東坡」の
題で所収）によるもので、判詞に「左は唐絵、右は大和絵、墨
絵にしやれて、色絵にうるはし」というように、「気色」の語
にもびつたりと対応する。また東坡は、第廿三番の左の句「詩
人ゆるせ松江の河豚といはん」が、「前赤壁賦」によつてお
り、「金沢のあそび、たのしいかな」ではじまる判詞も、「風
情」の語に適わしい。

ところが、杜甫については、句や判詞の中には今日までの注
釈では見出されていない。序文の「渭北の春」「江東の雲」云
々は、杜甫の「春日懷李白」によるが、この詩は、特に「しや

れ」と関わる場所があるとは思えない。かりにそう見られて
いたにしても、文脈上「しやれ」と関係づけるのは不都合であ
らう。「杜子がしやれ」は、どのような典拠によるのであろう
か。

二

『田舎之句合』の刊行された延宝八年、この時期の芭蕉及び
蕉門が「莊子」に傾倒し、『田舎之句合』の序文も判詞も、『
莊子』色に満ちており、彼らの読んでいた『莊子』が、『田舎
之句合』の序文中にも、「莊周が腹中を吞で、希逸が弁も口にふ
たす」というように、林希逸の注になる『莊子麻齋口義』（以
下「口義」と略称する）であることも、周知の事実である。

ところで、その『口義』には、『莊子』本文の解釈に、杜甫
・韓退之・蘇東坡・黄山谷ら、唐宋の詩文人の詩文を引用して
説いているところがある。『口義』に引用された詩文人たちの
側面が、芭蕉や蕉門たちにとつて、強い印象をもつて眼をうつ
たであろうことは想像に難くない。『田舎之句合』序の三人の
詩人も、この『口義』の文章によつていっていることは考えら
れないだろうか。以下、この点について検討を試みたい。

まず、『東坡が風情』については、『風情』という語があま
りにありふれた語なので、その指示するところも漠然としたも
のになるが、希逸の引用する東坡の中でまず、序文の中に、「
東坡が一生の文字只此より悟入す」の一節があり、『莊子』に
傾倒していた芭蕉らにとつて、東坡の詩文は実際にどう読んだ
かは別として、興味の持たれる対象であつたにちがいない。ま

た、「田子方」篇の註には、次のような東坡の引用が見られ、注目すべきものがある。希逸の註に、

東坡形容画竹与杜詩曰「神閑志定始一掃亦近」此意と見え、欄外の頭註に、

東坡題「与可画竹云与可画竹時見竹不見人豈獨不見人嗒然遺其身与竹化無窮出清新莊周世無有誰知此凝神 王介甫詩神閑意定始一掃切与造化論錙銖」とあるところで、「莊子」本文では、宋の元君が絵を画かせようとして、衆史の中に一人の「真画者」を見出すという条である。東坡の詩は、竹を画こうとしてその身を遺忘し竹と同化する凝神の作用を、莊子的なものとして詠じたものである。ここで、「三冊子」に「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」と私意を去ることを教えていることが想起される。この東坡の詩は、「松の事は松に習へ」云々という表現の源流の一つとしてすでにあげられているが、作品の清新さを生む凝神の作用をいうこの「口義」の部分は、「東坡が風情」の典拠として必ずしも不適當ではないであろう。

次に、「杜子がしゃれ」は、「齊物論」篇、「寓言」篇に、希逸が引用する杜甫の古詩の一句「瀟洒送日月」との対応が考えられる。この対応の意味については、後述する。

「山谷が気色」は、「齊物論」冒頭の、地籟を説き叙した部分に対する註として、

詩是有声画 謂其写二難状之景一也何曾見画 得个声一出
詩は有声画 謂其写二難状之景一也何曾見画 得个声一出
があり、頭註に、

山谷自贊云詩成「無色」之画「画出」無声之詩「云云本詩話

とあるものとの対応が考えられる。希逸は、「莊子」のこの部分について、「莊子之文は好處極めて多し。此の如きの一段又妙中之妙なる、一部の書の中此れ第一の文字と為す。特に莊子一部の書の中のみならず、古今の作者を合せて之を求むるとも亦此の一段の文字無けん」と最上級の褒辞を費して賞しているが、「詩は是有声の画」云々は、子葉が子游に風のさまざまなあり方を説いて、「而独この調調たると勺勺たるを見ずや」と、風に対して、「見ずや」といった措辞について述べられたものである。希逸の褒辞は、「天地の間、形無く影無きの風聞くべくして見るべからざる声却って筆頭に就いて画き得出す、南華老仙に非ずんば、安んぞ這般の手段を得ん。之を読むことに真に人をして手舞い足踏んで自ら已むことを知らざらしむ」と続く。

このような部分であるから、特に注目して読まれたであろうことはいうまでもなからう。芭蕉の「歌仙の贊」（天和年間作）は、この「齊物論」の部分を利用した文章である。

頭註の「詩は是有声の画」云々は、毛利貞齋の「莊子鷹齋口義大成俚諺鈔」（以下、「俚諺鈔」と略称する）にも、「詩話

」及び「豫章外集卷十六写真自讚」を出典としてあげている。「山谷が気色」の語は、芭蕉がいったにしろ、嵐雪が書いたにしろ、彼らが山谷詩の全貌を把握して判断した結果とは思われない。ごく大づかみにいえば、叙景詩は宋詩より唐詩の特色のようであり、「気色」の詩人ならば、例えば王維の方が適わしいであろう。この語に特定の典拠があるとすれば、貞齋は「詩話」や「豫章外集」をあげ、「口義」の頭註もこれらによつ

ているらしいが、芭蕉らの目に触れていることの確実な「口義」からの知識によるものと見るのが妥当かと思われる。もちろん、このような知識がすでに常識としてあり、それによつたということもあるかもしれないが。

このように見てくると、「田舎之句合」序に見える「東坡が風情」以下は、個々に見れば、人名と単語の結びつきのみで、その背景を探つて、確定的な典拠を主張することは困難な感じであるが、しかし一応、三者ともに希逸註との関連を求め得るのであれば、「田舎之句合」に見られる「莊子」や林希逸註との親密な関係から見ても、また特に、「東坡が風情」以下が「俳諧無尽経」の中に用いられていることから見ても、「口義」に拠っている可能性は大きいのではなからうか。

また、内容的には、東坡の「題与可画竹」に見られる私意を去る問題のごとき、後年にいたつても強い関心事であつたし、「気色」——景気の問題は、貞享元禄俳壇の大きな問題であつた。後述する杜甫の問題を含めて、注意されてよからう。

「田舎之句合」序の、その特色を表わすらしい語を伴つた三詩人の列挙は、単に恣意的な有名詩人の羅列ではなく、この時期の芭蕉らの「莊子」林希逸註に影響された問題意識による選択であり、記述の仕方であつたと思われる。

三

さて、「杜子がしやれ」は、さきに述べたごとく、「口義」の「奇物論」篇、「寓言」篇の希逸註に引用された「瀟洒送日月」の詩句によつていられると思われるが、この詩句は、古詩「自

京赴奉先縣詠懷五百字詩」中の一句で、杜甫自らの像を詠じた部分である。

この詩句が註として付された部分は、「奇物論」の、終りに近い一節で、罔両と景の間答や夢に胡蝶になる条のすぐ前の部分である。「莊子」の本文では、

何謂三和レ之ヲ以テ二天倪レ曰レ是レ不レ是レ然レ不レ是レ若レ果レ是レ也則レ是レ之レ異レ二乎不レ是レ也亦レ無レ弁然若レ果然也則然レ之レ異レ二乎不然レ也亦レ無レ弁化声レ之レ相待若レ其不レ相待和レ之ヲ以テ二天倪レ因レ之ヲ以テ二曼衍レ所レ以テ窮レ年也忘レ年忘レ義振レ於レ無境故寓レ諸無境

とあり、その「窮年」についての希逸の註に、

窮年猶三子美所謂瀟洒送日月也能如レ此則不三特可レ以窮年併与歳月忘之矣非三特忘歳月併与義理忘之矣年義既忘則振三動鼓舞於無物之境

とあつて、その頭註に、

杜詩非無三江海志瀟洒送日月

と見える。杜甫の詩は、「窮年」の境地を表わすものとして理解されている。「窮年」の境地は、さらに歳月を忘れ、義理を忘れて、無物の境に振動鼓舞するにいたる。その「窮年」は、天倪や曼衍によつて支えられている。今、毛利貞齋の「俚諺鈔」にうかがえば、「天倪」は、「何モ判断不決、癡鞭ニナル處ヲ、何レヲ不損」一様ニシテ、物物当然ニ至ラシムル者ハ、誰何ヤト尋求ムルニ、造作ニ不涉、安排ニモ不苦シテ、天然ニ万方太平ニシテ、物物和合シ調ヘテ、柳緑花紅ノ色ハ異ナレドモ、其常トスル處ヲ、如不失ニ、貴賤貧富寿夭禍福ニ至ルマデ、応時触類、其平ヲ得サシムル者ハ、造化ニ超タルハアラス、此ヲ名

ケテ、天倪ト云フ」のであり、「曼衍」は、「物我是非ヲ始トシテ、万物ニ至ルマデ、不礙シテ、優游自得スル」をいい、「千變万化の無窮順境逆境ニ至ルマデ、我ヨリ相手ニ執結ブコトヲセザル」という。要するに、造化に従い、優游自得する態度をいうのであるが、なお、貞齋による要約を聞けば、

彼我ヲ忘レ、是非ヲ識テ、一生ノ長キ、天倪ヲ用ヒテ、万境忘機接物、自和合シ、昼夜平生優游自在底ニ至ルゾナレバ、百年一生ノ歲月ヲモ、無事ニ窮尽シ、死生寿夭ヲモ忘レ、義不義ニ拘ルコトヲ忘レテ、無一物ノ境ニ、自由自在ニ振動セン。如此ナレバ、此身ハ、天地造化ト、一体ニシテ、天地ノ徳ト、齊シキガ故ニ、有ニモ不著、無ニモ不著シテ、本来無一物ノ竟ニ、性命ヲ安ニシテ、天年ヲ終ラントナリ。

ということになる。

さて、このようなところに杜甫の詩が引用されていることの意味は、どのようににとらえられようか。

その詩「自京赴奉先縣詠懷五百字」詩は、貞齋の『俚諺鈔』には、「杜詩千家註」卷二から引用されている。よつて記せば、
杜陵有_二布衣_一、老大_一意_{シテ}輒_{シテ}拙_{シテ}、許_{シテ}身_ヲ何_レ愚_{ナル}、窃_ニ穉_ト与_ニ契_ト、居然_ニ成_ニ溲_落、白_首甘_契闊_一、蓋_{シテ}棺_事則_レ已_ニ、比_{シテ}志_常觀_ニ豁_一、窮_{シテ}年_ヲ憂_ニ黎_元、嘆_息腸_内熱_一、取_テ笑_ニ同_学翁_一、浩歌_ニ弥_々激烈_一、非_レ無_ニ江_海志_一、瀟_洒送_ニ日_月一_ハ。

貞齋の、この詩に関する説明は、

杜子美ガ詩ハ我レニ忠勤ノ志篤ケレドモ、不知_ル己ガ故_ニ、不用_テ剩_ヘ天_宝十四_年十一_月二、安_禄山ガ乱_起リテ、妻子

皆_京兆_ノ、奉_先鼎_ニ害_ヲ逃_レ居_ル時_ニ二_作ル。今_ハ君_モ逆_徒ニ_悩サレ玉_ヒ、我_モ流_浪ノ身_ナレバ古_ノ稷_契ノ功_ニモ不_耻ト、自_負スルコトモ、徒_ニナレバ、以前_ニ、杜_ハ、口_ニニ_バカ_リ廣_大ナルコトヲ吐_テ言_フニ_応ズル功_モナシト、讒_ヲ受_タレドモ、時_如此_ナレバ、志_ヲ尽_サントスルニ無_差、今_{ヨリ}中国_ヲ去_テ、江_海ノ遠_方ヘモ、隱_レント、思_フ定_ムレバ諸事_ヲ打_忘レテ、運_ル日_月光_陰ヲ、無_為無_事ニ_過サントノ意ナリ。此_ニ借_用テハ、余_事ヲ雇_フコトハ不_入、唯_世事_ヲ放下_{シテ}、無_事ニ_歳月_ヲ送_ルマデノ意_入ニ_引用_タリとあり、さらに加えて、

莊子ヨリ、以後ナレドモ、杜子美ガ詠_ジタル、詩ノ意ト、一致_底ニ_到得_スル人_ゾナラバ、年_ト云_ヘバトテ、其_年数_ノミ_ニハ_不限_、四_時推_移寒_暑霜_雪ノ變_ニモ、昼_夜日_昇リ、月_降ル、晦_明ノ異_{ナル}ニ_モ、心_ハ不_顛倒_長ク_寂漠_ニシテ、無_為ナラントナリと解する。

『莊子』の理想的境地を杜詩の自画像の中に見出ししているわけで、その一致点は、「唯_世事_ヲ放下_{シテ}、無_事ニ_歳月_ヲ送_ル」という、俗世からの退隱、隱棲への志を示していることである。それは、造化随順、優游自得、年や義理を忘れて、無物の境地に振動鼓舞するという自由の世界を求めるものであるが、貞齋は、無為無事の寂漠の境地とし、例えば、年を忘れるということについて、歳月の意のみならず、四時の推移、昼夜の変化にも心を顛倒させないというごとき解釈を加える。四季の推移や昼夜の変化を観照する寂漠無為の境地とは、芭蕉の求めた閑寂

の境地に通じるのではなからうか。

芭蕉の杜甫傾倒の契機に、このような「莊子」的なものが介在していることを、「杜子がしやれ」―「瀟洒送日月」は示していはしないだろうか。もしそうだとすれば、時期的に深川隠棲の直前のことであるだけに、看過できないものがあろうと思われる。

さて、「瀟洒送日月」の詩句は、「口義」でもう一箇所、林註の中に引用されている。「寓言」篇の「卮言」に関する条で、やはり「齊物論」においてと同じく、「窮年」という語に付されたもので、従つて内容的には、さきものと変わりはない。卮言とは、「莊子」本文には、「卮言は日に出して和するに天倪を以つてす。因つて以つて曼衍にして年を窮むる所以なり」という。卮は洒卮、人皆飲んで味があるので卮言といい、日々に出づとは件々の中此言有り、和は調和、天倪は天理などという林註に従えば、「寓言」の、虚構をもつてする表現、重言の、先人の名をもつてする表現に対して、日々件々の中に出る自然の言であり、天理をもつて衆人の心を調和させて、久遠に自然の理を保つものと考えられているようである。「窮年」の生活と「卮言」の表現とは、密接な関係があるものとして説かれている。しかし、卮言は寓言とちがつて俳壇で問題になつた語彙でもなく、芭蕉らの、この語に関する理解や意見も徴し得ない。「卮言」という表現の思想と芭蕉の方法の関係については、今論すべきものを持たない。

以上、杜甫の詩の一句を引用する「口義」の所説を検討したが、「杜子がしやれ」が「瀟洒送日月」によることが認められ

るとすれば、杜甫の隠棲の志は、莊子の思想を背景として理解されていたようであり、芭蕉の場合、深川隠棲につながる問題として、特に興味を持たれるようである。

四

以上、「田舎之句合」の風雪の序に見える「東坡が風情、杜子がしやれ、山谷が気色」と「莊子鷹齋口義」の林希逸の註との対応を検討した。これらは、芭蕉や初期蕉門の者たちが、林希逸の註によつて「莊子」を読みつつ、どのような点に興味を持ち、どのように自らの内部にとりこんでいったか、そのきわめて初期の手がかりを提供するものではあるまいか。もちろん表明されたのは片々たる語句にすぎず、文章による思想の主張ではない。しかし、それぞれの対応が認められるならば、その背景にある思想は、当然彼らをとらえたものと考えることができよう。読まれた思想は、現実化されるのに、あるいは自らの思想として語るのには、多かれ少なかれ時間を要するであろう。私意を去れという主張や景気の問題は、後年、あるいは芭蕉によつて説かれ、または俳壇の大きな関心事となつたものであつた。また、「瀟洒送日月」の隠棲の問題は、芭蕉の一生をとらえた問題であつたといえよう。「東坡が風情」以下「俳諧無尽経」の表現は、思想の言葉としては、書物から得て知識的な、体験にうらづけられない生硬さが感じられる。

芭蕉や初期蕉門の作品に見える「莊子」を出典とする問題箇所を検討は、廣田二郎氏の「芭蕉の芸術」に詳しい。同書によれば、氏は、「桃青門弟独吟廿歌仙」では、表現の奇絶さに

ひかれて「莊子」を読みあさる傾向を示していたが、「俳諧合」に至っては、表現の奇絶さ、おもしろさだけでなく、その奥にある「莊子」の思想に関心を持ち、中でも「逍遙遊」・「無用の用」の思想に注視するようになってきている。また、「齊物論」によって、日常的意識を破り、相対的なものの見方を超えることも学び始めている。そこに人生観・世界観の深化が生じ、俳諧観もおのづから深化されて来て、単なる滑稽や奇絶を事とせず、作品のうちに思想性を求め、表現にも奇絶さやおもしろさとともに詩美をも求めるようになってきている^{注9}と述べて、その「莊子」からの思想性獲得の端緒を、この「田舎之句合」のあたりに認めておられる。「莊子」受容の状況からいっても、「東坡が風情」以下について、先のように見ることは許されるようである。

五

さて、深川隠棲後の芭蕉に杜甫への傾倒が顕著であることは周知のとおりである。廣田二郎氏は、「延宝八年前後の、漢詩文調へ傾斜を深め、漢詩文を「手本に」思い、「莊子」を学んで、談林寓言論を超克しようと志向しはじめた頃から、芭蕉は急激に杜甫の影響を彼に個有のかかわり方で受けはじめると述べ、その杜甫受容は、「杜甫における閑寂・拙・貧を、芭蕉は、日本の伝統の系譜の上に立って、「佗」^{注10}「佗ぶ」というニュアンスにおいて受容している」とされた。

たとえば、天和元年冬作の「乞食の翁」と呼ばれる文は、

窓舎西嶺千秋雪

門泊東海万里船

我其句を識て、其心ヲ見ず。その佗をはかりて、其樂をしらず。唯、老杜にまされる物は、独多病のみ。閑素茅舎の芭蕉にかくれて、自乞食の翁とよぶ。

櫓声波を打てはらわた氷る夜や涙
貧山の釜霜に鳴声寒シ

買水

氷にがく偃鼠が咽をうるほせり

歳暮

暮々てもちを木玉の佗寐哉

と、はじめに杜甫の絶句の二句をかかげて、三股のほとりの芭蕉庵の眺望とし、「閑素茅舎」の「貧」や「佗寐」の生活を観じているが、注目されるのは、「其句を識て、其心ヲ見ず」といい、「その佗をはかりて、其樂をしらず」というところであろう。表現の真意、「佗」の表現の、その内面の楽しみがわかないということは、謙辞でもあろうが、杜甫の境地になお及びがたい高さを認めているものと解される。杜甫の「佗」は、「樂」を伴っているものである。この認識は、杜甫を洒落の人と見ること無関係ではないであろう。

芭蕉はまた「多病」をいうが、その親しんだ杜律の中には、「江村」と題する、

清江一曲抱村流

長夏江村事事幽

自去自来堂上燕

相親相近水中鷗

老妻画纸为棋局

稚子敲针作钓钩

多病所須惟藥物

微軀此外復何求

があり、「杜律集解」には、「燕の自ら来去するは、物の並び育せるを見る。鷗の相ひ親近するは、公の機を忘るるを見る。妻子嬉戯各々適するは、公の俯畜老安少懷を見る。尾聯は自ら菓の外求むるなきを言ふ。公の胸次灑落にして、此の江村の幽意を構ふなり」と説き、多病の中で、胸次灑落にして機を忘れる日月を送る杜甫像を示している。「多病」の語は、芭蕉にとつて、隠者的な杜甫像につながるという自覚においてはじめて用いられた語であつたと思われる。

「杜子がいしやれ」は、深川隠棲後も、芭蕉にとつて一つの理想であつた。その隠者的相貌は、彼の杜甫理解が、さきに見たごとく「莊子」の「斉物論」などの林希逸註を介していることが、少なくとも一つの契機となつていゝのではなからうか。

注

- 1 「早春全集冷泉公亭詩序」(「恭靖先生遺稿」巻一、統々群書類従詩文部所収)。
- 2 寛永十六年田原仁左衛門板による。訓読は、稿者によること、以下同じ。
- 3 日本詩話叢書第三巻所収。
- 4 統々群書類従詩文部所収。
- 5 「此」は「莊子」を指す。なお、「莊子蘄齋口義」の引用は、寛文三年山屋治右衛門板によつた。これは便宜的に用いたもので、特別の理由はない。同書は、引用部分については、寛文五年風月庄左衛門板と異なるところはない。
- 6 小西書一氏「芭蕉と萬言説(二)」(「日本学士院紀要」第一八巻第三号、昭和三十五年一月)。
- 7 元禄十六年錢屋庄兵衛等刊。
- 8 「刻杜少陵先生詩分類集註」巻二所収のものは、「非_{スニ}無_レ江海志」が、「非_{スニ}無_レ

江漢志」となつていゝ。

9 同書二七七・八ページ。

10 同書一〇二ページ。

11 「定本芭蕉大成」による。文中「識」は、もと「職」とあるもの、同書に従つて正した。

12 「江村」の詩とともに、寛文拾年丸屋庄三郎板による。

なお、資料の引用に際して、旧字体を現行字体に改め、漢文の送り仮名に用いられた特殊な字、例えば「はコト、寸はトキ」など改めた部分がある。また、熟語、音訓を表わす記号は省略し、句読点を改めたところがある。